

学校教育における地域学習の現状と課題及びその効果的手法に関する試論 -地域資源継承のための方策として-

岩田 美耶

山梨大学生命環境学部地域社会システム学科4年

第1章 研究の背景

1980年代以降、少子化の進行に伴い若年層の人口が減少していることから、日本各地で高齢化が課題となっている。特に、農山村地域においては深刻である。そうしたことに起因する地域の人口減少と過疎化の進行は、社会的基盤の維持を困難にし、地域の衰退に拍車をかける。

こうした中で、農山村における環境保全、関係人口及び交流人口の増加に向けた取り組みが官民いずれにおいてもさまざまになされており、そうした取り組みでは農山村の魅力を発信するための地域資源の活用も重視されている。

また、核家族化や人口減少の進行によって、高齢者と次世代を担う若者の触れ合う機会が減少傾向にある。それは、農山村地域における地域資源の継承を困難とする一因ともなっている。それは、地域に対する理解や愛着、誇りの喪失をもたらし、結果的に農山村地域における人口流出、地域の衰退・消滅などの進行にも繋がる要因にもなりうる。

こうした事態を防ぐためには、地域資源の活用だけではなく、その前提として地域の中で資源を共有し、継承する取り組みも重要であり、そのための手段として学校教育における地域学習が注目されている。現在、義務教育の教育カリキュラムとしては、小学3・4学年の社会科において地域学習が扱われており、地域が直面する課題の解決や地域活性化のための学習などをおこなっている。

そして、こうした地域学習に関する授業で使用される「教材」としては、教科書に加え、市町村ごとに刊行されている社会科副読本が用いられていることが多いが、副読本の発行主体である市町村の合併が進行していることに伴い、社会科副読本の対象が広域化している。

こうした中で、当該地域の地域資源及び独自性の継承に貢献しうるものとして学校教育における地域学習に関する新たな知見について検討することは意義がある。

また、先行研究においても、市町村合併に伴う小学校社会科副読本をめぐる課題に関する研究などはなされているが、あくまで課題の分析にとどまっており、副読本という教材と「作業的、体験的な学習」（注1）という授業実践の連携という観点から、地域学習の現状と課題、効果的な手法などを検討する研究は今までに十分になされているとはいえず、その進展は学術的にも一定の意義が認められる。

第2章 研究の目的・方法

現代社会において、農山村の地域社会を持続させるためには、地域が受け継いできた資源・文化の共有及び継承も重要である。そのためには、前述のとおり学校教育が果たす役割も大きく、児童が地域資源（注2）に対する理解を深めるとともに、地域の歴史的な背景を反映している資源や特徴（本論文では、以下「地域の独自性」とする）の継承を可能にするような教育カリキュラムが展開されることが望まれる。

そこで、本研究では、農山村地域における地域資源及び「地域の独自性」の継承に着目し、学校教育を通じた地域学習の現状と課題及び効果的な実践方法の在り方について、「教材」及び「作業的、体験的な学習」（授業実践）という2つの観点からの検討を通じて明らかにする。

「教材」の検討では、山梨県内において刊行された各市町村の社会科副読本を対象とし、その内容の比較分析に基づき、地域学習教材としての副読本の現状と課題について明らかにすることを目的とする。

また、「作業的、体験的な学習」の検討では、小学校における地域探検の実践と、そこで得られたデータに基づき、児童の地域に対する理解の向上や地域への愛着・誇りの醸成に対する効果及び地域独自の資源を保護・継承する意識に対する効果を明らかにすることを目的とする。

第3章 山梨県社会科副読本の分析を通じた地域学習の現状と課題

1 研究の目的

本章では、学校教育での地域学習における「教材」のひとつである社会科副読本の役割及び問題点を明らかにするため、その内容について、空間軸、時間軸という視点から分析をおこなう。

空間軸とはある一定の時期に刊行された複数の市町村の副読本の内容を比較分析することであり、それを通じて、市町村に共通して見られる副読本全般の現状と課題について明らかにする。

また、時間軸とは副読本の改訂履歴の中でその内容の変遷を検討することであり、特に市町村合併によって生じる副読本の内容の変化とそこにみられる地域課題における諸課題を検討する。

2 社会科副読本の内容に関する分析（空間軸）

（1）分析対象と方法

山梨県内の市町村のうち、2019年までに副読本を発行したことがあるのは24市町村である。そのうち、2000年以前に発行されたものは、児童と地域との関わりが現在と異なっている場合があるため、それ以降に副読本を発行された21市町村20冊（注3）の最新の副読本を対象とし、それらの掲載内容について分析することを主たる目的とするため、これらが

現在の授業において継続して使用されているか否かは分析対象資料の前提としていない。

(2) 社会科副読本の現状と課題

多くの副読本では、扱われている項目が「市町村の様子」、「歴史」、「生活」の3つの内容に大別されるため、これらの項目ごとに、多くの副読本に共通する内容と市町村ごとに記述の有無や内容が異なる事項について分析する。

副読本の内容は、施設や地形などの地域で生活していくうえで重要になるものや、祭りや行事、伝統文化などの今でも受け継がれているものを中心的に取り上げており、副読本は地域の歴史的な背景を学ぶよりも、生活する術を学ぶことを重視しているといえる。地域で生活していくうえで不可欠な事項の学びを目的とする副読本での学習は、地区単位の地域に対する知識や理解が十分ではない。また、市町村合併により副読本の対象地域が広域化すると、学習内容と日常生活の繋がりが希薄になり、より一層地域への理解が困難になる。

加えて、市町村の各地区単位での地域資源についての記載がほとんどないため、副読本での学習は「地域の独自性」を学ぶ機会が少ないといえ、地域に対する興味が欠落すると考えられる。

したがって、「地域の独自性」について学習するうえで、現在の地域学習では地域の歴史を将来に継承することは困難であり、市町村合併が進むことによって地域独自の歴史は失われるといえる。

副読本における「作業的、体験的な学習」では、フィールドワークである地域探検がもっとも多く、8市町村で取り上げられていた。しかし、地域への愛着や誇りの醸成に効果的である児童の主観性を伸ばすことを目的としているのは、そのうちの3市町村のみであった。そのため、現在おこなわれているような地域探検では地域資源の継承に結びつかないことが懸念される。地域に対する愛着を向上させ、「地域の独自性」を継承するためには、児童が日頃から見ているような、「地域の独自性」をもつ資源について学習する機会を設けることが重要だと考えられる。

3 市町村合併前後の副読本の内容変化における比較分析（時間軸）

(1) 分析対象と方法

社会科副読本の内容について、市町村合併による行政区域拡大の影響を考察するため、2において分析対象とした市町村のうち、愛着や誇りの醸成に効果的な、児童の主観性を伸ばすことを目的とした地域学習をおこなっているという観点から、その分析に有効であると判断した現在の山梨県甲州市及び平成の合併以前の3市町村（旧塩山市、旧勝沼町、旧大和村）における副読本を対象とした。合併前の3市町村のうち、面積、人口ともにもっとも規模が大きい自治体は旧塩山市である。甲州市の最新の副読本と、旧塩山市、旧勝沼町、旧大和村において刊行された8冊の社会科副読本を分析対象とし、「地域の独自性」

に関する記載の比較分析をおこなう。

(2) 分析と考察

旧塩山市、旧大和村の副読本は、地域の特徴や歴史的背景を学ぶよりも、暮らすうえで重要となる安全、健康などに関する内容を中心としている点で、現在の甲州市の副読本における内容と類似していることがわかった。

特に、旧塩山市の副読本は、現在の甲州市の副読本と記載に大きな違いが認められなかったため、合併対象となる地域の中でももっとも規模が大きい旧塩山市で刊行された副読本の影響を強く受けて、合併後の副読本が作成されていることが明らかとなった。

一方で、旧勝沼町の副読本は、仕事の項目だけでなく、暮らしの移り変わり、暮らしの発展などにおける項目において、ブドウ栽培に関する記載が多数見られた。旧勝沼町の副読本は、地域の基幹産業となっているブドウ栽培を軸として、地域の発展や移り変わりについて記載されていることがわかる。したがって、甲州市における合併後の旧市町村の社会科副読本において、地域の特徴を反映した内容を学ぶことを目的とした場合、もっとも有効なのは旧勝沼町であると考えられる。

また、甲州市合併後の副読本には、旧勝沼町時代に多く記述されていたブドウ栽培に関する記述は仕事の項目のみとなり、地域の中心となっていた産業に関する記述が減少したことが明らかになった。市町村合併による行政区域の拡大の影響を受けて、社会科副読本という教材レベルで見た場合にも、地域の特徴を学ぶ機会が減少していることが指摘できる。

分析をおこなった市町村合併前の副読本の多くで、地域の歴史が学習できるような「むかしのようす」などの項目を設けている副読本があったため、合併前に記載されていたより細分化された地域単位での独自性に関する記述は減少している。

4 考察

副読本の内容分析により、市町村合併が進むにつれて、地域学習の内容と日常生活が結びつかない場合があることが明らかになった。また、社会科副読本に身近な地域に関する記述が少なくなることで、教育内容とその効果という面でも「地域の独自性」に対する理解や愛着が低下し、「地域の独自性」が失われる可能性が指摘できる。こうした可能性を低減し、「地域の独自性」を継承するために有効的な地域学習をおこなううえで効果的な方策のひとつとして小学校付近などの身近な地域を歩く地域探検があげられる。

第4章 小学校における地域探検などの実践を通じた効果的な地域学習手法

1 研究の目的と研究方法・対象

本章は、地域探検及びそれに関する取り組みにおける、児童の地域に対する理解の向上と地域への愛着の醸成に関する効果を考察することを目的とする。そのため、小学校の教育現場において、地域探検、企画展、地域探検まとめ授業の3段階の実践と評価を通じたアクションリサーチをおこなう。これらを通じて、児童の地域への理解・関心を向上させるための有効な教育手法について考察するとともに、それが地域への愛着の醸成及び地域の独自性の継承に資する可能性について提起する。

山梨県甲州市勝沼町にある甲州市立勝沼小学校、祝小学校、東雲小学校、菱山小学校の3年生を対象に取り組みをおこない、その成果に基づき検討をおこなった。なお、小学3年生は、学習指導要領において「身近な地域や市区町村の地理的環境」と「地域の様子の移り変わり」（文部科学省，2018，p. 32）について学習することが定められ、地域理解のための内容が扱われる年次に該当する。

2 地域探検

児童にデジタルカメラを配布し、地域探検の中で興味をもったものや気になったものを撮影させた。探検の途中で立ち止まるポイントを設け、書籍や道具を用いて身近にある地域資源について解説した。散策後に、児童に被写体の好き嫌いとお撮影理由を記入するシートを配布し、記述させた。

地域探検で撮影された被写体を分析すると、児童はブドウやワイン関係の資源、各地域のみにしかない施設、勝沼地域に共通している資源といった面において新たに関心を示したことがわかる。その点で、地域探検は、地域に関する幅広い分野における関心を向上させるうえで効果的だといえる。また、被写体の撮影理由において、地域探検中にした説明が引用されているものも多く見られたため、地域探検は地域に対する理解を深めることを可能にするといえる。

地域探検を経て、今までは「ただ見たことがある」という段階であった「日常生活にあるよくわからなかったもの」を児童が自分の言葉で説明できるきっかけとなり、地域への理解が深まったと考えられる。勝沼町の各地区独自の施設や資源、あるいは勝沼町全体に共通する資源に目を向け、児童のもつ勝沼町に対するアイデンティティがより幅広く明確になったといえる。

3 企画展

地域探検の成果を大人と共有するために、企画展「勝沼の時代（とき）を写す。」を開催した。展示場所は勝沼町内にある宮光園白蔵、ぶどうの丘、勝沼図書館などの文化・観光施設である。

ここでは、地域探検の成果を共有するために、小学生が撮影した写真とその撮影理由を

まとめ、学校ごとに写真の傾向を分析し記述したパネルを作成した。企画展では来場者に「小学生が撮影した写真の中で1番好きなもの」、「勝沼の印象」などについてのアンケートを実施した。

企画展来場者が地域探検の成果パネルを見て、「知らなかった、行ってみたい」とアンケートで回答している資源は、児童が地域探検まとめ授業で「観光客に紹介したいもの」として多くの回答があった資源と共通していた。このことから、勝沼地域の児童が勝沼地域で誇りや愛着を感じている資源に、大人も魅力を感じているといえる。地域探検の成果を共有することは、大人にも知られていない勝沼の魅力を児童の目線から感じることができ、新たな勝沼の一面を発見することを可能にする。そして地域探検で児童が撮影した写真を共有することは、観光客がいわゆる観光施設だけではなく勝沼の生活や生業に興味を持ち、地域内を散策したいと感じさせるきっかけづくりとして役割を果たしている。

また、来場者アンケートの「勝沼への印象」については、ブドウ関係の資源や自然に関する回答が高い割合を占めた。その一方で、勝沼地域の児童にとって「ブドウ畑は勝沼らしい」という認識は高くないということが地域探検まとめ授業の成果から指摘できる。道端にあるようなマンホール、道祖神、地蔵などの普段見ている景色に溶け込んでいるものを、勝沼地域の共通認識として捉えていることが明らかになった（4参照）。

児童から見た、ブドウを中心としない勝沼地域の景観を大人と共有することによって、大人が違った面から勝沼を見つめることが可能となった。地域探検の成果を共有する企画展は、大人がもつ勝沼に対するアイデンティティの幅を広げることに効果的である。

4 地域探検まとめ授業

地域探検のまとめとして4小学校3年生に授業をおこなった。授業は地域探検の振り返り、企画展での大人からの感想コメントの発表、自分の地域資源の再確認、他の地域における代表的な資源に関する学習の順に進めていき、これらをもとに自分の地域と他の地域にある資源の相違点を見つけ、発見シートに記述させた。挙げられた相違点をもとに自らの地域についての学びを深め、地域に対する理解を向上させた。最後に授業のまとめとして、「観光客に紹介したいもの」、「地域探検の感想」を感想シートに記述させた。

勝沼地域に共通するものとして、農村地域ならではの資源が多く回答される中、農村資源の外見の違いに注目し、違うものとしても多くの回答が見られた。このことから児童は日常的に身近に感じるものに興味・関心を示していると考えられる。地域探検まとめ授業は、同じ地域資源でも外見の違いから、自らの地域の独自の特徴を理解することを可能にするといえる。

「観光客に紹介したいもの」として児童が回答した資源の中には、自分の地区ではなく、比較した他の地区の地域資源を回答も見られたため、他の地区にはその地区の良さがあることを理解しているといえる。

自らの地域だけでなく、他の地域についても学ぶことで、自らの「地域の独自性」に対する理解がより一層深まったといえる。地域探検まとめ授業は、児童のもつ地域に対するアイデンティティを確立することが可能になる。

第5章 おわりに

以上の分析を踏まえ、社会科副読本の内容を現状のまま維持しつつ「地域の独自性」についての学習を地域探検で補うことで、市内全域の学習と身近な地域に関する学習の両方を満たすことができ、より効果的な地域学習をおこなうことができる。

こうした地域学習を確立することで、児童にとってより身近に感じられる、効果的な地域学習が実現できると考えられる。

注

- (1) 地域学習に代表される実際に活動体験を通して学びを深める地理授業のことである(戸井田 2013)。
- (2) 本論文では、地域資源として考えられる多様な要素の中でも特に地域の歴史文化的な背景をもつ資源を対象とする。
- (3) 市町村数と冊数が一致していないのは、富士河口湖町及び鳴沢村が共同で1冊の副読本を刊行しているためである。

参考文献

- 戸井田克己 (2013) 「地理学習の指導法」 『人文地理学辞典』 丸善出版, pp. 628-629
- 文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 社会編』 日本文教出版, p. 32